Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

観光地づくりオーラルヒストリー　＜第４回＞

観光研究への意欲が新たな道を切り開く

－民間から大学へ、実務の経験を学術に活かして観光学の発展に貢献

（前）帝京大学経済学部　教授、（元）立教大学観光学部 教授
溝尾良隆氏
（現 公益財団法人日本交通公社　非常勤理事）

1941（昭和 16）年東京都に生まれ群馬県で育つ。1964（昭和 39）年東京教育大学理学部地理学専攻科卒業。同年、株式会社日本交通公社外人旅行部入社。1969（昭和 44）年、財団法人日本交通公社に移籍（調査室）。1989（平成元）年、立教大学社会学部観光学科教授、立教大学観光学部観光学科教授、観光学科長、観光学部長、立教大学観光学部交流文化学科　教授、2007（平成 19）年、同大学を定年退職。同年、城西国際大学観光学部ウェルネスツーリズム学科教授、2009（平成 21）年、帝京大学経済学部観光経営学科教授、2011（平成 23）年、同大学経済学部地域経済学科教授・学科長、2015（平成 27）年同大学を退職。

１．「観光」への接近

【なぜ観光の道を選んだのか】

〈小学校～中学〉

子どもの頃から地理が大好きでした。児童年鑑みたいな本をよく見ていて、どこの県はどういう特徴があるかといったことにすごく関心がありました。この頃は大学に行くとは思っておらず、小学6年の時に地図帳で知った田中啓爾先生に「高校を卒業したら弟子にしてください」という手紙を出しました。この方は日本の地理学の大家でとても重要な人物です。返事は来ませんでしたけれどね。

私が30代くらいの頃、中学時代の先生が「教育研修会に使いたいから、当時の地理のノートを貸して欲しい」と言われて、送ったこともあります。

生まれは東京浜松町ですが、父が交通事故で亡くなったことと戦争に突入ということもあり、母の実家の群馬県松井田町で高校までいました。中学2年の夏休みの自由研究で『群馬県の地理』をまとめ、3年生の時には松井田の商店を全部訪ねて、ここに売っている品物はどこから来ているのか、松井田で作ったものはどこに行っているかなどを調べました。理科の自由研究では、中学の3年間、松井田町の天気（含む温度）を1日も欠かさずに記録して、東京と比較しました。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

写真１　溝尾良隆氏への取材風景
（2014（平成26）年10月7日、（公財）日本交通公社ライブラリー）

〈高校時代～大学〉

　地理という科目は専門の先生が教えるとは限りません。高校では運が悪いことに、私のクラスの地理担当は社会学専門の大学出たての教員1年生で、地理のことを全然知らず、質問すると「わかりませんです」と答えるのです。私があまりに質問するもので、嫌われて試験では一番いい点とっても、Aをくれませんでした。
　3年になると補習授業で別の地理専門の先生に教わる機会があり、その先生とは以後、ずっと年賀状のやりとりをしていました。

　大学で地理学をやると初めから決めていました。家中は猛反対で、「つぶしがきかないからやめろ、経済をやれ」。でも聞きませんでした。
　当時一番地理学が強かったのが、東京教育大学でした。地理学で１番古い東大は生徒が5人くらい、先生が3～4人で理系の自然地理学でした。2番目の京都大学は文系の人文地理学で、歴史中心でした。調べたら、北大から名古屋大までは地理学は全部理学部に属し、そこから西になると文学部に属している。

　東京教育大学は後から地理学の講座を作ったので、自然地理学と人文地理学を総合化した形で、学生も先生も一番多く、1学年の学生は30人でした。ちなみに東

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

京教育大学の先生は、定年になると立正大学に行っていました。立正大学は地理学の学生が100人もいて、私立の中では地理学が一番強い大学でした。
　私は落ちてもいいから、とにかく東京教育大学に行こうと決めました。当時一期校と二期校があり、二期は教員養成でした。私は先生になるつもりはなかったので、二期校は受けませんでした。

　でも、東京教育大学に受かるとは思いませんでした。浪人を覚悟して先に予備校の申込書を取りに行き、皆がいなくなった夕方にこっそり発表を見に行ったら、自分の番号があってもうびっくりしました。その時入ったのは25人でしたから、足切りの最後が私だったのでしょう。
　大学に入ったら、東京の連中は地理の鍛え方がやっぱり違う。レベルが違う、すごくショック。4年間じゃとても追いつかないと焦りました。卒業論文は人文地理の青野壽郎先生の指導で、当時異例の8名による共同研究でした。タイトルは『都市化の進展が地域に与える影響』で、それぞれ農業、住宅など異なるテーマを担当し、私は交通を担当しました。

【観光との出会いはいつ、どこで…】

〈株式会社日本交通公社への就職〉

　卒業後は大学院には行かず、民間企業に行こう、できれば地理に関係するところがいいなと思っていました。
　本が好きだったので岩波書店に就職したかったのですが、試験時期が遅く、落ちたらどこも行けません。そこで、まず日本航空に行きましたが「来年はパイロットしかとらないから。君はメガネかけているのでダメだね」と言われました。当時は日本航空の入社試験もそんなのんびりした感じでした。
　元JTB社長の舩山龍二さんは大学の2年先輩で、すでに日本交通公社に入社していたので、「交通公社はこれからJTBになる」と興味ある話を聞いて、高校の先生なら決まっているので、「交通公社を受けるか迷っている」、「受かるかどうかわからないから、とにかく受けてみたら」と言われました。
　その助言にしたがい受けてみたら受かってしまったので、1964(昭和39)年4月に株式会社日本交通公社に入社しました。株式会社は前年の12月に財団から分離しているので、私たちは株式会社の第1号社員でした。日本交通公社への入社が私の観光との出会いとなっていくのです。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

表１　溝尾良隆氏の経歴

【経歴】
1941(昭和 16)年　東京都生まれ
1964(昭和 39)年　東京教育大学理学部地理学専攻科卒業
1964(昭和39)年　株式会社日本交通公社外人旅行部入社
1969(昭和44)年　財団法人日本交通公社に移籍
1989(平成元)年　立教大学社会学部観光学科　教授
1998(平成 10)年　立教大学観光学部観光学科　教授
1996-2001(平成 8-13)年　同大学観光学科長
2002-2003(平成 14-15)年　同大学観光学部長
2006(平成 18)年　立教大学観光学部交流文化学科　教授
2007(平成 19)年　同大学を定年退職
2007-2009(平成 19-21)年 城西国際大学観光学部ウェルネスツーリズム学科　教授
2009-2011(平成 21-23)年　帝京大学経済学部観光経営学科　教授
2011-2015(平成 23-27)年 帝京大学経済学部地域経済学科　教授、学科長
【業務実績】(財団在職時 1969-1988 年度)
・旅行業の営業所を一例として- 都市型立地産業の研究 基金論文(1972)
・入湯税による温泉市町村の利用実態(1973)
・観光地整備に伴う地域社会経済への波及効果に関する調査(1974)
・東北地区観光基礎調査(東北の観光の現状と将来)(1975)
・温泉地再開発基本計画の策定(温泉地の諸課題と今後の方策)(1977)
・佐賀県内商工会地区における観光開発と地域振興計画の策定(1978)
・店舗総合調査(JTB 店舗網の出店と再編成のための調査)(1978)
・温泉地再開発基本計画の策定(温泉地の諸課題と今後の方策－宇奈月・山代)(1978)
・宇奈月温泉再開発計画調査(1979)
・白川村の発展振興に関する調査研究・計画策定(1979)
・宇奈月温泉再開発計画調査(1980)
・観光に関する１３章 観光地の取り組むべき課題(1980)
・科学万博・関連観光コース認定に関する課題(1981)
・山形市観光基本計画策定業務(1981)
・山形市観光基本計画策定調査(1981)
・茨城の景観づくり調査(1982)
・外国人観光客受入体制整備計画調査(1982)
・観光基本計画の策定（山形市観光基本計画）(1982)
・佐渡観光基本構想計画策定(1982)
・国際観光の経済的社会的効果(1983)
・壱岐島観光レクリエーション開発基本計画策定調査(1983)
・東部地域観光振興計画策定調査(1983)

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

・はとバス定期観光バス事業商品計画調査(1983)
・広域観光ルート策定(1983)
・五島観光レクリエーション開発整備計画(1984)
・離島観光に関する基礎的研究(1984)
・瀬戸大橋観光ルート策定調査(1984)
・浅間温泉活路開拓ビジョン調査(1984)
・滋賀県観光資源フールド調査(1985)
・高速交通体系関連観光地整備計画調査(1985)
・小規模事業対策特別推進事業調査(1985)
・那珂湊市観光施設等整備計画調査(1985)
・商圏調査（商圏調査－１都市１店舗型－）(1985)
・瀬戸内海海上観光開発調査（瀬戸内海観光開発調査）(1985)
・南東北・越後広域観光ルート(広域観光ルート企画調査)(1986)
・愛媛県総合観光計画調査(1986)
・魅力ある観光地づくり事業調査(1987)
・観光資源の活用・展開に関する研究(1987)
・群馬県野外博物館構想と松井田町坂本宿保存開発計画(1987)
・旅行産業研究(1988)
・特進事業に係わる現地実査(1988)
・観光資源一覧表作成に関する調査研究(1988)
・川越市観光基本計画調査（観光行政施策検討調査）(1988)
・地方に於ける生活時間の変化に対応した都市作りの方向(1988)

【主な委員等】
・運輸省観光政策審議会専門委員会委員
（1980～1981 年、1984～1985 年、1999～2000 年）
・運輸政策審議会専門委員(1990～1991 年)
・国土庁地域振興ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ(1988～1996 年)
・国土庁国土審議会山村振興対策特別委員会専門委員(1990～1998 年)
・東京都観光事業審議会副会長･小委員会座長(1995～1999 年)
・豊島区都市計画審議会委員(1995～2010 年)
・旅行地理検定試験委員（1995 年～）
・川越市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員(1998 年～)
・川越市景観審議会委員(1989～2002 年)
・財団法人碓氷峠交流記念財団理事（1999～2013 年）
・静岡県観光交流懇話会座長(2001～2005 年)
・埼玉県　彩の国観光創造塾塾頭（2002～2007 年）
・環境省エコツーリズム推進会議委員(2003～2004 年)
・日本観光研究学会会長（2004-2005 年）
・総務省富士山共生ワーキンググループ委員(2004～2005 年)

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

・国土交通省観光マネジメント高度化のための人材育成検討委員会委員
（2005～2006 年）
・JICA 国際協力機構　メルコスール観光振興プロジェクト国内支援委員会委員長
（2005～2009 年）
・日本観光研究学会評議員（2006 年～）
・高速道路交流推進財団　観光資源活用トータルプラン委員長（2006 年～）
・JICA 国際協力機構　「観光セクター開発」課題支援委員会委員（2009 年～）
・台東区ダウンタウンアートサポート懇談会座長（2009 年～）
・コンテンツツーリズム学会名誉会長（2013 年～）
・川越市第 4 次総合計画審議会会長（2015 年 2 月～）

【主要著書（単著・共著）】
・『観光地の評価手法』（1970 年）、（財）日本交通公社
・『旅行業』（1986 年）、編著東洋経済新聞社
・『実践と応用　地理学講座６』（1989 年）、編著、古今書院
・『観光事業と経営　たのしみ列島の創造』（1990 年）、東洋経済新報社
・『観光を読む　地域振興への提言』（1994 年）古今書院
・『戦後日本産業史』杉岡碩夫編著（1995 年）東洋経済新報社
・『現代日本の地域変化』（1997 年）、編著、古今書院
・『観光学入門』（2001 年）、岡本伸之編著、有斐閣
・『観光地の再生と人材育成』下平尾勲ほか編著、日本評論社
・『観光まちづくり　現場からの報告』（2007 年）原書房
・『観光学の基礎』（2009 年）編著、原書房
・『ご当地ソング　風景百年史』（2011 年）、原書房
・『観光学と景観』（2011 年）、古今書院
・『改訂新版　観光学－基本と実践』（2015 年）、古今書院

【論文等】
・景観評価に関する地理学的研究-わが国の湖沼を事例として-、人文地理、35(1)、1983、pp.40-56
・「観光」の定義をめぐって、立教大学社会学部研究紀要・応用社会学研免 35、1993.3、pp.39-48
・佐渡地域における観光客増加に果たした島内努力と市町村間における観光客不均衡の要因に関する研究、立正地理学会、地域研究、33(2)、1993
・観光施設の整備と観光の通年化、脇田武光・石原照敏編、「観光開発と地域振興」、古今書院、1996.4、pp.66-72
・群馬県新治村におけるリゾート開発計画とリゾート地域の形成過程,経済地理学年報,42（3)、1996.9、pp.18-32
・新治村の観光発展過程と観光地形成,立教大学観光学部紀要、2,2000.3、pp.1-16

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

・川越市一番街商店街地域における商業振興と町並み保全、人文地理 52-3、2000.6、pp. 84-99
・川越市における地域ブランドとしてのサツマイモのイメージ形成、立教大学観光学部紀要、4,2002. 3、pp. 57-67
・愛媛県西海町における民宿の経営実態、「漁村地域における交流と連携一最終報告」財団法人東京水産振興会、2004.3、pp.217-228
・ダイビング事業の進展に伴う地域社会との葛藤、立教大学観光学部紀要、6,2004.3、pp.1-12
・観光地の計画とあり方、山本正三ほか編「日本地誌第 2 巻『日本総論『人文・社会編』、朝倉書店、2006.8、pp.386-391

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

２.「観光」における取り組み

【観光分野で何をやってきたのか】

〈外人旅行中央営業所での仕事〉

株式会社日本交通公社に入社して、私が最初に配属されたのが外人旅行中央営業所西米課団体係です。私たちより3年前までは、大学卒採用は10人以下で、その人たちはみな外人旅行に配属されていました。だから外人旅行部に入った人は、会社の中枢部に行く、エリートの集まりといわれました。もちろん私たちのときは、同期が70人くらいいて、15人くらいが外人旅行に配属されたので、そんなエリートが行く部署ではありません。先輩たちはエリートです。オリンピック要員だったので、英語はもちろん、ドイツ語やフランス語、ロシア語、スペイン語、中国語ができる人がいました。語学系でない人も5～6人いましたが、彼らは入社前の1月からバイトしていたのでタイプも英語もでき、外人旅行を希望した人たちです。語学専門に何もやってなかったのは私1人。私は、出版部や国内旅行を希望していました。たいへんなところに入った感じでした。

外人旅行に入ってよかったのは東京オリンピックを経験したこと、それにいい上司に恵まれたことです。当時、最後にはJTBの専務なった小竹直隆さんは係長の下の主任で私を指導する立場でした。私が外人旅行の部署から出たいと言ったら怒られました。「溝尾君、いつでも出してあげるけど、出る時は惜しまれつつ出ないとダメだ。能力がなくて追い出されたという形だと一生そういうレッテルがつく。これから3年間は一切出たいと言うな」と。今でも身にしみている言葉で、就職する学生たちにもよく言っています。

小竹さんは私に合う仕事をやらせてくれました。たとえば冬は外人旅行の客はなく暇で 「溝尾くん、市場分析をしよう」と言って、どこの旅行会社が何人送って、過去に比べてどうかという分析や、バードウォッチングとか山登り、博物館といった、専門性のある手間のかかる団体ツアーを私にやらせてくれました。

ほかの人は仕事が早いから、誰がやっても時間がかかり、なおかつ私が好きそうな内容のツアーを振ってくれたのです。そのように部下の適性をちゃんと見て行う指導方法は、勉強になりました。

〈財団法人日本交通公社への移籍の経緯〉

財団法人日本交通公社の存在は、会社に入った当初は知りませんでした。外人旅行中央営業所で働いているとき、財団調査部から『観光産業の経済効果-小豆島

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

における理論的研究-』(1966)(図1)という本が出版されたというのをたまたまJTB新聞で目にして、財団の存在を知り「これは私がやることだ」と思いました。

図1 『観光産業の経済効果-小豆島における理論的研究-』(1966)

すぐに財団に行き、この本をいただけないかというと横溝博さん（旅館経営の専門家）が対応してくれました。「君、こういうことに興味があるの？」と聞かれたので、「はい、私の専門に近いです」と言って、ほかの報告書もいっぱいもらって帰ってきました。

どうしたら異動できるかと考え、日本観光協会が主催している観光の論文懸賞で横溝さんが入賞したことを知りました。東京教育大学の先輩達も菅平の研究で賞をもらっていました。「そうか、この懸賞に受かれば財団に行ける」と思った私は、三浦半島の観光発展に影響を及ぼした京浜急行という主題で論文を書こうと勉強を始めました（完成しないうちに異動になりました）。

「経営数学」という科目の社推薦の通信教育をやったのも、外人旅行を出るためでした。全国でも10人受けるかどうかくらい難しい科目でした。私はこれで賞をもらって、授業料が全部免除になりました。局長に呼ばれて「君、（外人旅行にいて）なんでこんなことやってるの」と聞かれて、しめたと思って「この部署を出たいから」と答えました。しかし、西米課の団体で私が一番古くなって、5年もいるといわゆる便利屋になってきてしまい、出るに出られなくなってきていました。

そういう中、入社時の係長が再び課長として戻ってきました。「まだここを出たいのか」と聞かれたので、「課長がいる間に出してほしい」と頼んだら、課長は最後の確認をしたのでしょう、次の週の朝礼で突然、財団への異動が発表されました。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

永松紀義君は私の大学の同級生で一緒にJTBに入り、新宿営業所から私より1年早く財団の総務部に上司とともに異動してきていました（後に、財団の非常勤理事に）。彼も、私の財団への異動を後押ししてくれました。入社して5年近くが経っていました。

〈財団移籍後の仕事〉

財団には1969(昭和44)年2月に移籍しました。最初に私が配属されたのは調査部で旅行調査を担当しました。3月末で辞める職員がいたので、その後任として入りました。前任者がやっていたのが、羽田空港の制限区域内での外国人へのインタビュー調査です。私は外人旅行にいたからちょうどいいということで、その仕事を引き継ぎました。

財団が一大飛躍する建設省の観光資源調査をやった時も、旅行調査から参加しました。原重一さんが大きい調査だからみんなでやるということで、永松君を総務から引っ張り、私も旅行調査の仕事をやりつつ手伝っていました。計画室に異動したのは、1974(昭和49)年頃です。旅行調査よりも計画策定などの方が地理学の知識も生かせるし、自分のやりたいことに近いと感じていましたので、原さんに引っ張ってもらいました。

財団の中では旅館は横溝さん、観光地計画は原さん、旅行動向や心理は内藤さんと、みな得意分野を持っていたので、その中で自分はどこに入り込もうかと考えました。そこで、自分は当時日本で急激にふえている民宿をやろうと決めました。「すきま」分野を狙ったのです。民宿については勉強しました。経営学的なアプローチではなく、民宿の地域的分布や、地域別の発展過程、交通機関が民宿の発展にどういう影響を与えたかなど地理学的な観点から調べました。

そんなつもりはなかったのですが、すぐに民宿の専門家とよばれるようになり、その関係で初めてNHKテレビに出たり、民宿ガイドの巻頭言を書いたりするようになりました。この頃から、「私だからできる」という存在価値がないとダメだ、人と違うことをしようといったことは考えていました。

当時、財団に国鉄から委託が来ることはあり得なかったのですが、私は地域の変化に関心があったので、運輸省の仕事で「山陽新幹線が開通して地域はどう変わったか」の研究をしましたので、国鉄から「東北新幹線が開通したら東北はどうなるか」というテーマで調査委託が来ました。当時の企画課長は落合さんという有名な人で、その仕事がきっかけで落合さんと仲良くなり、財団と国鉄でソフトボール大会をしたりしました。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

その後は新潟に新幹線が開通するというので、新潟がどう変化するかという調査もしました。つくば博が開催されたら茨城県はどうなるか、瀬戸大橋が開通したら香川県はどうなるかなど、ビッグイベントに伴う地域変化の分析などもよくやりました。

地域で言えば原さんは北海道で私は東北、省庁は原さんが環境庁と建設省、私は運輸省と総理府、原さんは計画論やサイトプランに強く、私はマクロかつソフト的な調査に強いという形で、自然に棲み分けができていきました。私はかなり県のマクロ的な計画が多かった。熊本県、佐賀県、長崎県、山形県、福島県、埼玉県、香川県、徳島県、岡山県、愛媛県、茨城県、新潟県…。ずいぶん県の仕事をしています。

愛媛県、長崎県、新潟県は財団在籍時に基本計画(図2)を作ったのがきっかけで、今もつきあいがあります。愛媛県は観光関係の委員会があると委員長を私に頼んできますし、いまでも委員の人たちと同窓会をしています。

図2 『愛媛県総合観光計画(調査)』(1987)

〈JTBの支店調査〉

普段の委託事業ではなかなか自分のやりたいことができないので、毎年10万円の予算をもらって自主研究をやっていました。コンサルタントは自分でテーマが選べないので、委託の仕事だけでなく、自分なりのテーマを追いかけないといけないと思っていました。

自主研究で、JTBの支店を調査したこともあります。当時約300店舗あった中で1都市1店舗型の120支店を対象に、支店の売上と都市の力がどういう相関関係にあるのかを調べました。当時一支店として最も売上が多かったのが浦和支店です。それは当然で、大宮と川口に支店がなかったのですね。3市の100万都市に対して1

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

支店しかないからで、むしろもっと売上が上げられるはずだと。そういう分析をそれぞれの支店についてやりました。

JTBの支店立地は政治的な背景で決まることも多いのですが、営業力が低いので廃止した方がいい支店、販売増が期待できるので存続させてもいい支店、もっと力を入れれば伸びる支店などと評価して、さらにこれから支店を新設すべき都市も挙げました。

そうしたら、株式会社日本交通公社の社長室がこの研究を評価してくれて、これを参考にして店舗計画を作ってくれたのです。社長室から「もっと詳しく調査してくれ」と言われ、調査費をいただいてさらに深掘りした調査を行いました。

その後は、大都市の多店舗展開についての調査が、財団に正式な調査として委託されました。自分の地理学の知識や理論を生かせたケースと言えます。

〈はとバスの調査〉

はとバスの商品ラインアップについても調査をしたことがあります。はとバスはかつて、株式会社JTBと東京都が50%ずつ出資していました。その調査はJTBからはとバスに出向していて、そこで営業部長をやっていた人から頼まれました。「つまらない商品がいっぱいあるが、俺がつまんないとは言えないから…」と。

そこで全商品をチェックして、「これはすぐやめる」「これは工夫して続ける」と仕分けしていった。立正大学教授服部銈二郎先生を起用して、新しいバスツアーも企画しました。話はうまいし、東京のことをよく知っているので、満員で評判よかったです。

ストリップショーを見せるコースもありました。日劇ミュージックホールがなくなった後で、そのそばのビルに劇場があったのですが、女性も含めて何人かで見にいったら、全員声を揃えて「つまらない」と。このコースはやめた方がいいと結論づけたら、本当になくなりました。

後楽園の巨人戦を見るバスツアーというのもありました。なぜわざわざツアーにするのかというと、試合前に元選手や野球評論家が今日の見どころの解説をして、参加者と話し合う時間を設けている。地方から来る人はなかなかチケットがとれないので、こういうツアーはニーズがあるから存続させようということになった。いろいろ勉強になりました。

〈クルーズに関する調査〉

1985(昭和60)年から3年間かけて、日本のクルーズ需要についての調査もやりました。当時の民社党は横断的な造船組合と関係をもっていたので、国会で民社党の議員が「日本の造船は韓国に負けており、このままではダメだ。ついては外国で流行っているクルーズ船を日本でも作り、クルーズを行ったらどうか」と国会

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

で質問しました。それに対して中曽根首相が「私もクルーズの楽しみは知っているが、日本で成り立つかは調査しないとわからない」と言ったことから、調査の委託が総理府へ、そして財団に来て、私と有馬(元職員)さんで担当することになりました。

ありがたいことに、造船組合が資料を一式くれました。日本の造船業界で何が問題で、外国ではどうかといったことがわかりました。彼らにいろいろ教えてもらって、私たちも1週間、カリブ海へ5万トンの船に乗りに行きました。

そこから、カリブ海では1年中運航できるけど、地中海では冬は運航できない、日本発着のクルーズも冬が厳しいとか、今の法律だとカジノができないといった問題点を挙げていきました。あとは船を作る時、日本で作ると高くなってしまうこと、税金の問題から船籍をどこに置くか、船内スタッフをすべて日本人にするかといった課題も挙げています。

結論としては、当分はクルーズ船先行で需要を喚起する必要があるが、やがて日本人もクルーズを利用するようになるというもので、その通りになったと言えます。この調査については、私の『観光を読む 地域振興の提言』(1994)にも書いています。

〈初めての著書〉

市販の書籍で初めて出版したのが『旅行業』(図3)という共著本です。東洋経済新報社から1986(昭和61)年に出版されました。それまで小論文はたくさん書いていましたが、本を出したのは初めてでした。

本が出版されたのは、観光労連の委員長から受けた相談がきっかけです。「組合の委員長で国内旅行出身者は海外のことがわからないし、海外旅行出身者は国内のことがわからない。委員長であれば、旅行業の全体像がわかなくてはいけない、そのようなテキストを作ってくれ」と言われました。

図3 『旅行業』(1986)

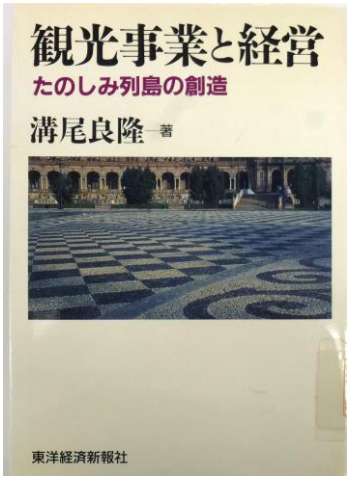

図4 『観光事業と経営』(1990)

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

そこでJTB、近畿日本ツーリスト、日本旅行、東急観光から4人を集め、旅行業は基本的に中小企業ということで、中小企業に精通している経済評論家杉岡碩夫先生に委員長をお願いしました。私は事務局長を務め、1年くらいかけて報告書をまとめました。すると杉岡さんが「すごくいいレポートだ」と言って、東洋経済新報社に出版するよう売り込んで、『旅行業』が完成したのです。

その縁で、その後1990(平成2)年に東洋経済新報社から『観光事業と経営』(図4)という初めての単著本を出しました。1994(平成6)年には、財団で『観光読本』(図5)を出版していますが、その前に、1986年に『観光ビジネスの手引き』(図6)を私が主査をしていた旅行調査室のメンバーで東洋経済から出しているのです。

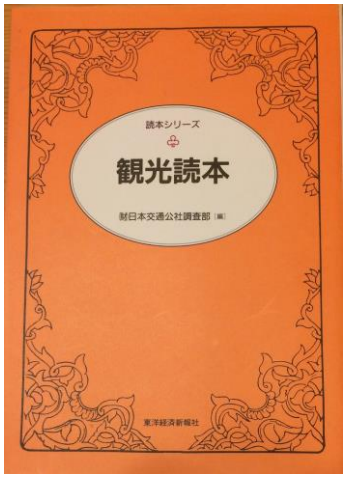

図5『観光読本』(1994)

図6『観光ビジネスの手引き』(1986)

〈博士論文の執筆〉

1970(昭和45)年に鈴木忠義先生の提案で、財団の自主研究で観光資源を客観的に評価する研究が始まりました。研究期間は2年間で、事務方の中心となった私は研究成果を『観光地の評価手法』(図7)としてまとめ、多方面から注目を集めました。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

図7　『観光地の評価手法』(1970)

しかし、やり残した課題も多かったので、財団に「もう2年継続できないか」と希望を出したのですが、ダメだと却下されました。そこで、10万円の自主研究費をもらって、やり残した課題を『湖の評価手法』で研究をしました。

ちょうどその頃、日本交通公社の出版事業局も観光資源の研究に注目するようになりました。『新日本ガイド』(写真2)というガイドブックを発刊することになり、全国の観光対象資源や施設を評価しようということで、私を指名して依頼が来ました。

そこで私は観光地の評価手法のメンバーに協力を依頼し、以前の研究手法を改善して、より具体的な尺度でより多くの観光資源を対象に評価を行いました。こうして新日本ガイドは1973(昭和48)年から発行がスタートしました。私は1975(昭和50)年に、この研究をまとめて『多次元解析による観光資源の評価』という論文を発表しました。

写真2　『新日本ガイド』

するとその論文を見て、教育大時代からご指導いただいている筑波大の山本正三先生から「これまでの研究をもっと発展させると、博士論文になる」という電

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

話がかかってきました。先生は私が「先行研究として、この研究がなぜ必要かという論文を新しく1つ書きなさい。それに今回発表した論文を合わせて3本揃えば博士論文に仕上げることができる」と言われました。

私は自分の研究がオリジナルだと思っているから、先行研究なんて全然読んでなくて、文献を探したり読んだりするのが大変でしたが、後輩達がいろいろ本を持っていたので、アメリカやイギリスの論文を随分読みました。その結果、自分の研究にはオリジナリティがあると改めて確信でき、自信が持てました。
財団の仕事が忙しかったので、論文を書くのは土日や夏休みなどで、月に1度は論文を持って筑波大まで通いました。山本先生は具体的な指摘はしないのですが、「週刊誌のような文章だ」といったコメントを言われ、それを受けて書き直すことを繰り返しました。当時はパソコンがないので、ちょっとした文章の切り貼りも大変でした。

とても感謝しているのは、副査となった奥野隆史先生が私の論文を懇切丁寧に「てにをは」まで細かく全部直してくれたことです。その影響で、私が大学で学生を教えるようになった時も、卒業論文は全部目を通して、一字一句まで直すようにしています。

〈立教大学への転出〉

私は1983(昭和58)年から隔年で立正大学の地理学科、1985(昭和60)年からは立教大学の観光学科で非常勤講師を務めていました。博士論文を仕上げて、1985年に筑波大学で博士号をとると、大学の地理教員にならないかという誘いが2つくらいありました。でもまだ組織が弱体の財団を辞めたら勝手すぎると思って断りました。

その後、調査部長に生え抜きの原さんがなったし、直採用で入った林さんや小久保君などが課長になったので、これでいつ辞めてもいいかなと思っていたら、1988(昭和63)年の10月頃、私が北海道に出張していた時に、立教大学から誘いの電話がかかってきました。教員が一人急に辞めることになったので、専任として採用したいというお話でした。

私は「わかりました。行きます」と答えました。そして財団に戻り、原さんと東京教育大学の先輩でもある総務部長小澤博さんの2人だけに、私の意向を伝えました。小沢さんは行きなさいといってくれましたが、「若い人が動揺するといけないので、2月までは絶対に言わないでくれ」と頼まれました。
翌年2月になり、課長を全部集めて、私は財団を辞めると伝えました。やはりみな動揺しましたが、こうして財団を離れ、1989(平成元)年4月から立教大学社会学部観光学科の教授に着任しました。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

当時の立教大学の観光学科は財団のレポート等を参考にして勉強しているような状況でした。そこで、着任してすぐ行ったのがカリキュラムの見直しです。観光英語など、専門学校で教えるような実務的な科目を廃止し、観光計画などの専門科目を増やそうと主張しました。その理由として挙げたのが「将来、日本のいろんな大学に観光学科や観光学部がたくさんできるだろう。その時に参考にするのが立教大学のカリキュラムだから、今から恥ずかしくないものを作っておきたい」ということでした。

観光計画なんて難しくて学生が理解できないと言われたけど、それは教える人の問題だと言って・・・。結局、私の希望はかなりカリキュラムに生かされました。財団時代から非常勤で10年くらい通っていたので、周囲も私が生意気なことはすでに知っていたし(笑)。ちょうど私が着任した年にリゾート法が施行されたので、観光に対する機運の高まりもありました。

立教大学で観光学部を作るときも「全国各地に観光学科がどんどんできている。そういう中で、抜きん出るために、立教大学は観光学部を一番手で作らないとだめだ」、「二番手、三番手ではダメだ」と力説しました。
学部長会で観光学部が必要かどうか、かなり議論が行われました。文学部や法学部の連中は「観光学部を作ってもいいけど、観光が学問と言えるのか」と言う。「法学部や文学部は明治時代にできて歴史はあるけど、外国の借り物ではないか」と反論し、「これから新しいものを作るのだから、時間がかかる。産みの苦しみを理解してくれ」と主張して戦いました。そうして奮闘した末に観光学部が生まれたわけですが、作ってよかったと今でも思います。

大学へ入ったとき決意したのは、「学生が観光業界に就職するときに、溝尾ゼミです、と胸を張っていえるようなゼミを作ること」でした。授業もしっかりと教えるが、大人数なので、ゼミこそが学生を鍛える場と考えました。学生には、「縁故、地縁、贈収賄なんでもよいが、自分より優秀なひとを推薦しろ」、面接は、ゼミが2年からだったので、希望者が1年のときに3年生2名、2年生1名が一つのグループになって面接させ、最大20名まで合格にしました。一方、レポートも提出させ、こちらは、私が採点し、面接で落ちた学生で優秀なのを拾い上げました。ゼミでは、学生が新聞を読まないので、アナログは承知で新聞を読ませ、テーマ別の発表をさせました。学生の中には、初めて日経新聞をとり、その面白さがわかり、卒業しても日経新聞をとるようになったというのもいます。年に４～5回の東京や東京周辺の日帰りフィールドワークで、地域の見方を教え、年に1回、3泊のゼミ調査を、東京を離れて国内外で行いました。それらはすべて報告書として残っています。大学では必修ではありませんが、私のゼミではもちろん、全員卒業論文を書かなければいけません。卒論の構想や発表を、2年～4年、全員が新治村

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

に毎年集まり、ときには卒業生も集まり、議論しました。こうして300名以上のゼミ生が誕生し、旅行業や行政の中堅となって活躍しています。

私は2007(平成19)年、立教大学を65歳で定年退職しましたが、在籍18年間で社会学部の観光学科長を6年、移行期もあったので重複して観光学部観光学科長を4年間務め、観光学部の二代目観光学部長を務めました。当時、観光学科から博士号が一つも出ていなくて、韓国の大学から「立教大学はなぜ博士号をださないのか」といわれました。「必ず出す」と約束して、韓国出身の私の教え子が観光分野での博士第一号となりました。彼はいま九州産業大学の学部長を務めています。その後、たくさんの博士が誕生しています。

〈地域とのつきあいその1 新治村〉

長く付き合ってきた地域はいくつもありますが、その一つが群馬県新治村(現みなかみ町)です。最初のきっかけは、新治村のリーダー格のひとが財団に訪れ、たまたま相手をしたのが私でした。別荘開発をやろうと思っているので相談にのってほしいということでした。当時は別荘開発が盛んでした。

私はその時に「眺望がいいなど別荘の適地であっても、別荘を買う人は軽井沢などの有名な場所を求めるから、新治村ではダメですよ。私は群馬県人だからよくわかる」と言ったら、「え、群馬県人なのですか」という話になり、「だったらまず場所を見てください。すごくいいところだから」と言われて、見に行きました。確かにいい場所だったので、別荘は無理だけれど、村をよくするために何を作ればいいか考えようということになりました。その土地の観光的利用計画を策定することにしました。

それで村の中でこれはという人に会い、新治村どうしたらよいかとヒアリングしました。その一人として猿ケ京ホテル社長を紹介されました。私が聞き役でしたが、話が終わったら、そばにいた奥さんが、私の話も聞いてくれと言う。「この旅館をどうしたらよいか、自分と主人は全然方向が合わない。私は団体旅行とか受けるのは実はいや」。私は、将来的には奥さんの目指す方向がいいと思うが、今のうちに団体旅行でお金を儲けて、そのお金で好きなように改築したらいいいいとアドバイスしました。

ロビーにあるゲームコーナーはやめた方がいい、地下のお風呂の明るいところに、と気づいたことを指摘していたら、コンサルタントをお願いしますと言われて500万円の予算がつきました。私は旅館の経営診断はそれまで経験がなかったのですが、社長と奥さんがいないところで、職員にヒアリングさせてくれるよう頼

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

んで、その意見を元に部屋数を減らして、質をあげて値段もたかくすることもでき、売上も増えました。

そうこうするうちに、猿ケ京の観光協会や旅館組合が研修旅行に行くとき、いつも私がコーディネーターとして同行するようになりました。その時に、「将来、村をしょって立つ男だ」と紹介されたのが鈴木和雄村会議員でした。彼が村長選に出ることになり、私も応援演説しました。

鈴木さんが村長になってから、新治村との本格的なおつきあいが始まりました。特に策定した「農村公園構想」が実現して、毎日新聞社からその年の最優秀賞である「毎日・地方自治大賞」をもらいました。

写真3　新治村須川宿

〈地域とのつき合いその2　米沢市〉

米沢市とのつき合いも長いです。財団にいた頃、観光基本計画(図8,9)を作ったのですが、それから20年後、立教大学に務めるようになってから、もう一度米沢市から3人がみえて「会津と手を組んで広域観光をやりたい。まずはそのためのシンポジウムを開催したい」と相談されました。

それに対して私はその程度のことはみなさんでできるでしょう。「観光サミットを米沢で開いて、全国に発信したらどうか」と提案しました。「メンバーは山形県出身のJTBの船山社長(当時)を呼ぼう」。あとは国際交流に詳しい、当時立教の観光学部にいた鳥飼玖美子教授、山形県副知事、当時JRで東北支社長だった清水慎一さんになり、それぞれ20分ずつ話してもらい、その後に私が質問するという形式のシンポジウムを開きました。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

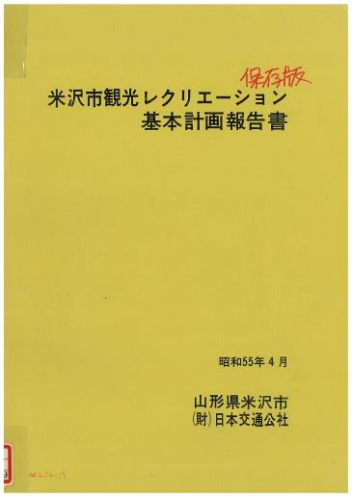

図8 『米沢市観光レクリエーション基本計画 報告書』(1980)

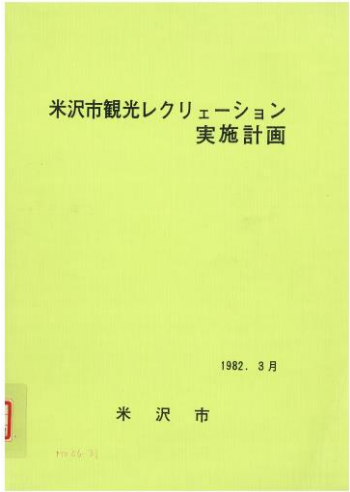

図9『米沢市観光レクリエーション実施計画 報告書』(1982)

それが終わった後、これからどうしたらいいという話になり、観光に関する人材を育成する塾をやろうという話になりました。塾はゼミ形式にして、当初応募人数は20人を予定していましたが、ふたを開けてみると80人以上の申し込みがありました。そこで親しい人は落とし、男女や地域、職業などのバランスを考え50人に増員してメンバーを選びました。その中には議員も行政の人もいました。

それから2年間、私は2か月に1回現地に通いました。私が彼らに言ったのは「観光というと、みんなああすべきだ、こうすべきだと勝手なことを言うけれど、意見を出すときにベースが同じであることが大事だ」。共通するベースがないまま、それぞれ好き勝手なことを言っていては、何もまとまらない。そこで半年間、私が都市観光や温泉地などについて観光の基本を話し、夏休みには米沢をどうしたらいいか宿題を出しました。秋に再び開講すると、提出した宿題の答えをテーマごとに分類して、5つの課題に絞り込みました。この5つを解決すれば米沢はよくなるということで、男女、年齢、職業をばらつかせて10人ずつ5つのグループを作って研究をしました。

次の年は研究結果を具体化する作業に入りました。最後に発表会が行われましたが、私は市長や観光協会長、商工会会頭といった来賓の挨拶はやめて、彼らが発表を聞き、どう思ったか感想を話してもらいました。

米沢の小野川温泉にも関わっていました。前に基本計画を作った翌年、市の依頼で小野川の計画をつくりましたが、もの別れになった。地元の旅館の人たちからスキー場を1基から5基に増やしたいと希望したのを、「５基程度では客は来ない。その前に一人前の旅館と観光地を作れ」と言ったらケンカになってしまい、報告書は反故にされた。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

でも、その息子の二代目になったら「うちの親父達が間違っていました。計画は正しかった。その通りにやります」と言ってきました。

かれらは、頑張っていてソフト事業が評価されて、小野川が注目され始めていた。しかし、小野川温泉はソフトだけでなく、やはりハードもよくないと魅力がない。ハード先行ではダメだとよく言われるけど、ハードを作る時にちゃんと考えられたソフトが入っていればいい。

いま、小野川温泉では旅館1軒1軒が改築する場合のデザインが決まっているので、10年くらい経てば変わるだろうと思います。そうやって頑張っていると、国も県も自然と応援してくれるようになってきています。

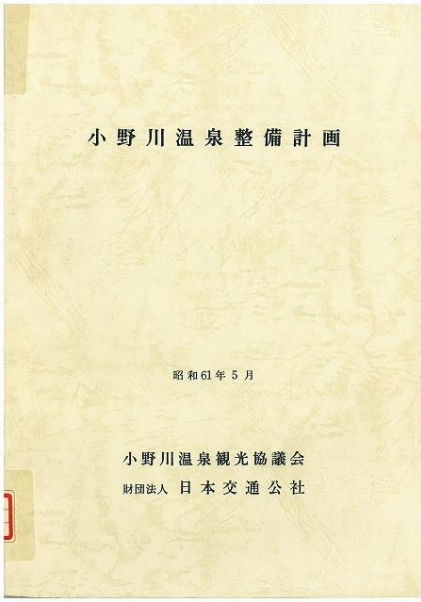

図10『小野川温泉整備計画』(1986)

【観光分野での業績は何か】
〈「広く浅く」観光をカバー〉

コンサルの仕事は相手がテーマを決め、それに対応するからどうしてもフィールドが広く浅くなります。なんでも対応できるようになる。1つの研究課題を掘り下げて行く学者とは違います。学者は理論からフィールドに入るけど、私たちはその逆のパターンで、フィールドを経て理論にたどり着くボトムアップのアプローチを長年やってきました。

学者のように同じことをずっとやり続けるという、一つの山をじっくり攻略するより、ある山を登った瞬間にすぐ次の山を目指すタイプです。「日本百名山」を著した深田久弥もそうだったと思います。ですから、私の著書や研究範囲はこれまで話したように資源評価、民宿やクルーズなど多岐に渡ります。ご当地ソングの歌謡曲を地域の観点から全部研究して『ご当地ソング　風景百年史』(2011)(図11)という書籍も出しました。守備範囲は「広く浅い」と言えます。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

ただ、調査テーマを変えながら、次々と仕事が来て長い付き合いになった群馬県新治村、新潟県佐渡島、香川県琴平町、私の地元川越市については、『観光まちづくり　現場からの報告』(2007)(図12)として刊行しました。

また、何かテーマを与えられたら、自分で全部やるというより、どうやったら最善の解決ができるか、誰にどういう形で頼むのが一番いいかをまず考えます。自分でできることはもちろん自分でやりますが、その分野で自分よりスキルが上の人、あるいは自分にはないスキルがある人に頼むことで、よりよいものになります。

それはやはり、いろんな分野のいろんな人を知っていないとできません。広く浅く、いろいろな分野をカバーしてきたことである意味、プロデューサー的な視点も育まれたと思います。

図11『ご当地ソング　風景百年史』(2011)

図12『観光まちづくり　現場からの報告』(2007)

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

〈自分の勉強が相手の勉強に〉

とにかく現場には足を運んで、徹底的に見るようにしていました。平成の大合併の前、日本の市町村は東京と大阪の区を入れて3,323あった。2007(平成9)年現在、私は調査などの目的でそのうちの57%に足を運んでいます。いずれもただ通過しただけではなくて、ちゃんと降り立った場所です。泊まったところは全市町村の27%くらいを占めますね。佐渡のように、何十泊もしていても、記録は数か所です。

私はわがままだから、熊本県でも愛媛県でも、仕事する先の地域は全部見せてくれと言って、ほとんど車で回ってもらっていました。今は委託する側も受ける側も、そういう余裕がなかなかないから難しいとは思いますが、現場を見ることは大事だと思います。

米沢市では市役所に入りたての新人と仕事することになって、彼に米沢じゅうを車で案内してもらいました。彼に言ったのは「2～3年で異動になるけど、観光の部署にいる間は残業もいとわずめいっぱい頑張って観光の専門家になってしまうことだ」。彼はその後に別の部署に行ったけど、最後は観光部長になってまた戻って来た。今も仲良くしています。「若い頃に勉強してよかった」と言われました。「あれこれ質問されて、それに答えなきゃいけないので、運転して回った方も勉強になりますから」。愛媛県の課長も「溝尾さんの運転手をやって勉強になりました」とよく言います。

相手側にもそうやって伸びていく人、若い頃から輝いている人がいる。そういう人とは、観光に関係ない部署に行っても、よく飲んだりしながら結果的に長くつきあっています。そこから広がっていくネットワークもありますね。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

３．「観光」に対する失敗と反省

【我が国の観光のなにが問題か】

〈自治体は企画課的発想の転換を〉

県や市町村などの自治体は、観光課を企画課のような業務に転換しないとダメだと思います。グリーンツーリズムは農水関係、エコツーリズムは環境関係の部署が担当する。それぞれが専門化してくると、従来の観光課はインバウンドと宣伝と施設管理くらいしかやることがなくなります。エコツーリズムもグリーンツーリズムも、観光分野に取り込んでいく。

企画課のように地域を総合的にどのような地域にしたらよいかという総合戦略を作るしくみを作っていく。国の縦割りを責めるのではなく、自治体は縦割りをうまく利用して、総合戦略のなかに一つひとつうまくあてはめていけばいい。

いま、観光に関する補助金はいろいろな方面から出ていて、すごく充実しています。自分たちがやりたいことがあって、そのために補助金を申請するならいいけど、初めにまず補助金ありきの場合が多い。補助金をとることが成果だと思ってしまう。それは地域のためにはならない。

まず何をやるか、補助金を正しく活用するためにも総合戦略は必要であり、そのためにはやはり自治体に企画課的な発想が必要だと痛感しています。

〈画一的な取り組み〉

いまの日本の観光の現場でこわいと感じるのは、全国すぐ一つの色に染まることです。足湯が流行ればみんな足湯を作り、フラワーツーリズムならみんな花を植え始める、最近ではアニメや妖怪だという。このように、何かがいいと言われれば、なんでもいっせいにやり出す。そういった画一的な観光の取り組みはどうなのかと懸念しています。

〈いま考えている二つのまちの事例～那珂川町と南牧村〉

栃木県に那珂川町という町があります。私が所属していた帝京大学地域経済学科と地域協定を結んだことがきっかけでたまたま知り、行ってみたのですが、いい素材がいっぱいある。いわむらかずお絵本の丘美術館には、たくさんのファンが来ています。このほかに馬頭広重美術館があり、安藤広重の作品が展示されています。建物は隈研吾の初期の作品で、これが地元の竹や葦、杉を使っていて繊細ですごくいい。この美術館に行くと「ご関心があるのは建築ですか、浮世絵ですか」と聞かれるくらい、建物自体にも価値があり、建築と展示それぞれを目的に多くの人が訪れています。ほかにもこの町には、内陸でありながら温泉を使っ

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

たトラフグの養殖に成功していたり、間伐材からバイオマスにも取り組んだりしています。
　でもそれぞれの施設の連携がないうえに、旅行者もその目的のところへ行って帰ってしまう。那珂川町へ行きたいわけでなく、ここが那珂川町と知らずに来ているわけです。せっかく優れたものがいろいろあるのに、総合化して発信していない。

　ネット社会になるとその傾向がさらに強まってくる。簡単に情報を発信できるのはネット社会のいいところでもありますが、その一点だけを目的に来て帰ってしまうという弊害もあります。総合的な情報発信をして町としての魅力をアピールすることが課題と思います。
　問題がもう一つあって、こんなによいものをもっていていろいろやっているのに、この町は県内で最も女性や若者の人口が少なくなる地域の一つと言われています。提携しているが町の人たちに「住みたくなるまち、これはあなた方の問題だから、自分たちで考えてほしい」。那珂川町が住みたくなる町かどうか、なぜ住みたくない町なのか。働き場所がないからなのか、病院不足か、育児や教育環境の問題なのか。たとえば病院だったら自分の町になくても隣町にあればいいわけです。自分の町だけで解決しようとしても難しいので、もっと広域で考え、隣接する市町村と連携するという考え方もある。

　もう一つは群馬県の南牧村です。人口は2000人ほどで、65歳以上が人口全体に占める比率が日本で最も高く、高齢化率が日本最高の村として有名になってしまいました。ところがここの自然も歴史もよいものをもっている。私が群馬県出身ということもあり、個人的にも何とかしたいと思って、親しい人に声をかけて、南牧村応援団みたいなものを作ろうとしています。
　そういう風に何かやっていかないと、人口減少や地域再生の問題はどうしようもない。まず、いま住んでいる人たちに元気と勇気を与えたい。那珂川町と南牧村、どちらも今の日本の農山村を象徴する場所だと思います。そういう地域にたまたま関わったので、自分なりに動いてみようと思っています。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

５.これからの「観光」・「観光地づくり・「観光計画」への提言

【入り込み統計の廃止を】

国が宿泊統計を出すようになったのは評価できると思います。でも、県の年間の入り込み統計は、もうやめた方がいい。各県の観光基本統計に「入り込み数の目標は5年後に何人にする」といったことがよく書かれている。しかし、ベースになるデータがいい加減なのに、何を基準に判断するのか。海水浴やスキーなど、イベントや施設ごとに個々で発表するのはまあいいと思うけど、年間の入り込みというのはどこまで正確な数字なのか、非常に疑問があります。

きちんと測れないものはやめた方がいい。宿泊統計をしっかりとっていれば、それで十分だと思います。宿泊統計は外国人がどれくらい訪れているのかがわかるし、そのデータをもとに滞在日数を延ばそうといった目標も立てられます。

しかし、宿泊統計でも気になることがあります。ある地域に民宿が30軒あっても全部が宿泊者数のデータを出しているわけではありません。たとえば、そのうち13軒が宿泊者数を報告したとすると、13軒のデータをどういう計算式で30軒分に引き伸ばしているのか。そういう根拠がもっとクリアにされるといいのではないかと思います。

【良い観光地とは　～どうすればよい観光地ができるか】

〈生まれ変わったおごと温泉〉

2015(平成27)年に出した『改訂新版 観光学 ―基本と実践』(図13)という本で、私は温泉地をどういう尺度でみるかということについて書きました。Aという温泉地で成功したことがBという温泉地にあてはまるとは限りません。基本的にはそれぞれ状況が異なり、個別で取り組まなければいけないけれど、その中でもいくつか地域の特色からグルーピングしてみました。たとえば、賑やかな楽しい温泉地を作ろうとしたら、どういう要素が必要なのか。旅館があり、温泉があり、街中の賑わいの中、そぞろ歩きを楽しめる空間が必要であるなど。

賑やかではないが自然が豊かなところは、自然をどう生かしたらいいか、自然の中を歩く楽しみを取り入れるとか。そういう風に温泉地をいくつかのタイプに分け、自分の温泉地はどれにあてはまるのかを考え、そこで共通する要素を生かすのが大事ではないかというのが、この本で私が言いたかったことです。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

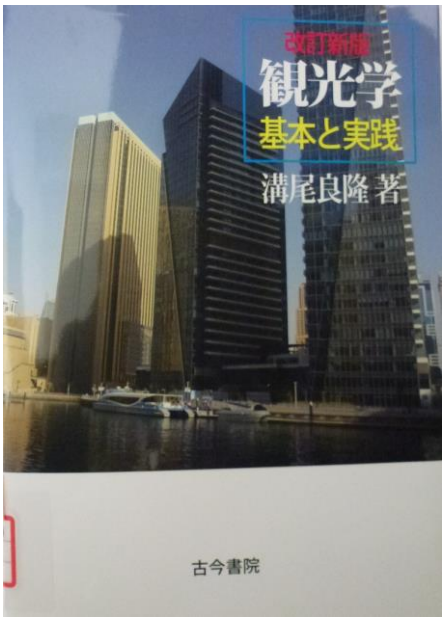

図13 『改訂新版 観光学 ―基本と実践』(2015)

しかし、どのタイプにもあてはまらない温泉もあります。その一つが、滋賀県の琵琶湖湖畔にあるおごと温泉です。古くからすぐそばに「雄琴」という歓楽街があり、男性が遊ぶための滞在拠点として有名だった温泉地です。現在も歓楽街は存在しますが、おごと温泉はそういったイメージを一新し、まずは「雄琴」という名前をひらがなに変え、駅名もひらがなに変えました。

評価できるのは、この温泉の旅館2代目、3代目の若手達が2年間、勉強会を続け、その結果、ほかの温泉地の旅館の真似をしてもいいけど、おごとの中でお互いの真似はやめよう、それぞれが特色ある旅館を作ろうと決めました。みんなが集まることで変化のある温泉地にしようということです。また、おごと温泉自体には見どころは何もないので、ここをベースに京都や滋賀に足を延ばしてもらおうというアプローチをとりました。

そのように考え方を切り替え、アプローチを変えたら、今はすごく人気が出ています。家族連れも滞在するようになりました。おごと温泉の「湯本舘」3代目主人の針谷了さんは、今、日本旅館協会の会長を務めています。それだけリーダー性を持っていたということです。

私は台東区とのつき合いも長いのですが、観光計画(図14)を作った後にそれを実現させるための会議を設置することを提案しました。台東区はそれを実行に移し、委員会のメンバーも半分くらい残して、来年度は計画の中からどの項目を反映するかという会議をやっている。つねに計画をどう実現していくか考えている。よいことと思います。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

良い観光地を作るにはまず、地域で方向性（グランドデザイン）を決めていくことです。すぐには実現できなくても、みんなで決めて同じ方向を目指すことが大事でしょう。

図 14　『台東区観光ビジョン』（2001）

2014 年 10 月 7 日

公益財団法人日本交通公社会ライブラリーにて

取材者：公益財団法人日本交通公社観光政策研究部
堀木美告、後藤健太郎

2015 年 6 月 10 日文章校正・追加終了

本レポートの引用・転載に関しましては、以下 URL をご確認ください。
http://www.jtb.or.jp/etc